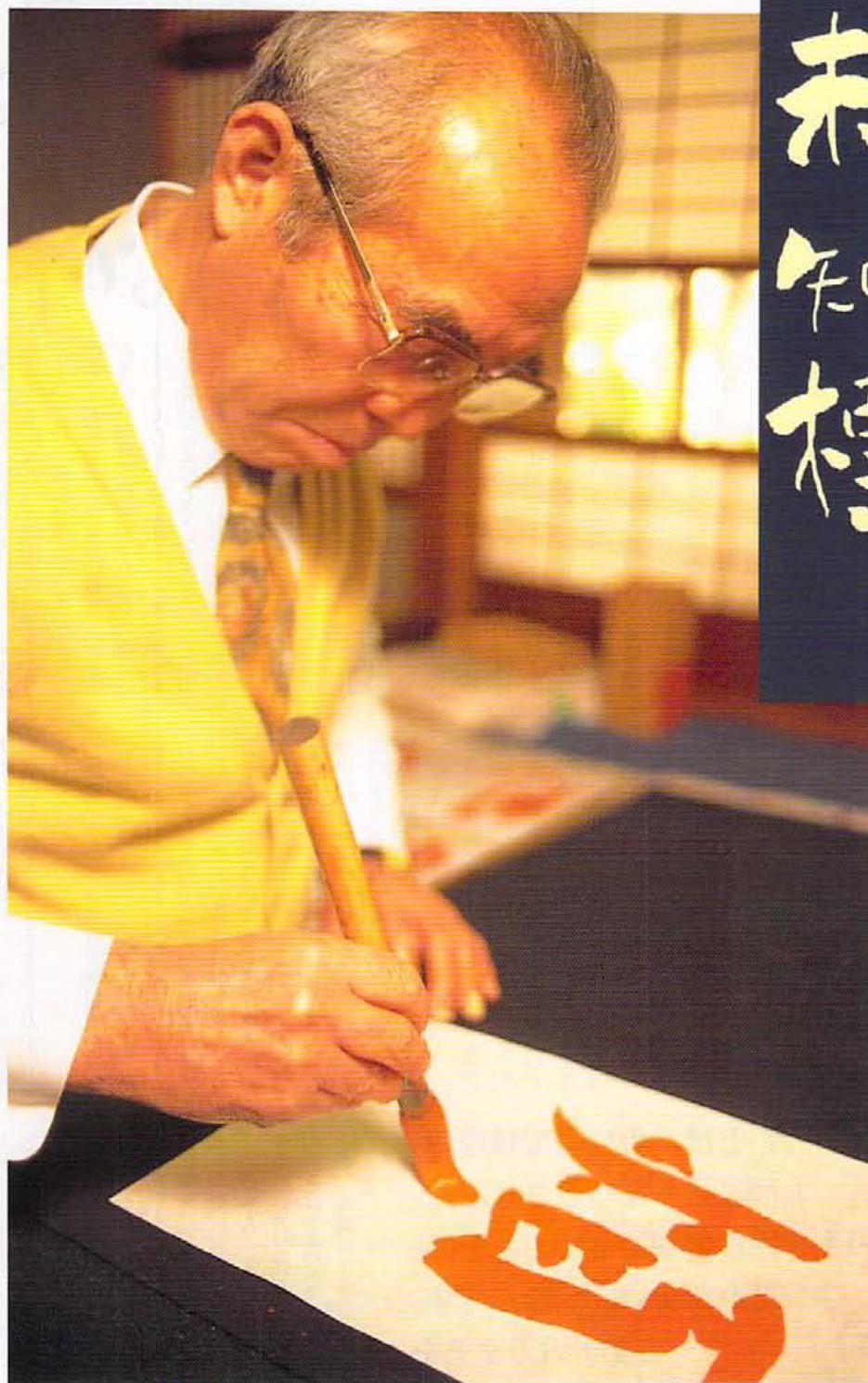


すまじば 未^し知^ち標^{ひょう}の町

第四十三弾

今岡徳夫先生の “嗚呼、富岡鉄斎” 編



昭和二十六年、
鳥根の師範学校を卒業した青年が
書の道を極めようと京都にやってきた。
彼は小学校の教諭でもあったが、
斯界の大家・森田子龍師に弟子入り、
昼は教員、夜は書道家として
創作活動をつづける日々を送った。
以来、京都での生活も四十有余年。
今、彼の目を惹き続けている
数々の“モニュメント”をめぐる
或る授業？がはじまろうとしている。

師範学校時代から書道を専攻して
たという。もちろん書は好きだったが、
本当は体育を専攻するつもりだった。
しかし、当時は担任が学生の専攻科目
を決めるという、ちょっと今では想像
できない気風も残っていた。「やんちゃ
な」彼をみて、体育よりも書道をと担
任は勧めた。

卒業してからは地元の小学校に勤
務。教鞭をとるかたわらで書家・上田
桑鳩に師事、通信教授を受けるよう
もなっていた。そんな或る日、上田桑
鳩が森田子龍をともなつて鳥根を訪れ
ることがあった。目的は書の講演と講
習会である。もちろん彼も呼び寄せら
れ、師の手伝いをするようになった。
思えば、これが運命的な出会いという
ものだったのだろうか。講習会で筆を
執る森田子龍の姿をみて、彼は魂に斧
を打ち込まれたような気分になった。
その鮮烈な余韻は一行が去ったあとも
醒めることはなく、それどころか、「教
員を辞めて上田先生か森田先生に弟子
入りしたい。書の創作にもっと励んで
みたい・・・」とさえ思いつめた。

未だ知らぬ すべり標の町

つくねんと迷う日々をすこすうちに、京都で講習会が開かれるという通知が彼のもとにきた。三泊四日の講習を受ける間、目の前には森田子龍師がいた。いや、正確に云えば森田師の書があったといべきなのかも知れない。遂に弟子入りしたいと申し出た。「私は弟子をとらないことにしているのだ」。それが師の答えだった。しかし怯まなかった。講習会からの帰路、京都へ出てゆくことを決意した。そのとき彼は二十二歳の青年だった。

郷里では反対された。書の創作だけでどうやって生活していくのか。それが周囲の意見だった。悩み続けていた矢先、京都で教員の欠員があり、教員を探していることを知った。師範学校の恩師が、京都の小学校（城陽市・久津川小学校）に勤務する友人から持ちかけられた話だった。渡りに船である。昭和二十六年、京都へ移った彼は望みどおり森田子龍師に師事することでもできた。以来、京都で八校に勤務、出水小学校の校長として退職するまで「二足の草鞋」を履きつづけるのである。

彼——今岡徳夫氏は小学校に勤務するかたわらで、書の創作活動にも打ち込んできた。ちよつとユニークな経歴をもつ。教師と書道家という立場を両立させた希有な存在だ。

富岡鉄斎の書に魅かれているという今岡氏。今回はそんな氏に京都に残るさまざまな「鉄斎の足跡」を紹介していただくという企画である。寺や神社の石碑、老舗菓子店の看板など、よく目にするものの中に鉄斎の書はたくさんある。今岡氏はそのひとつひとつを前にするたびに、「現れてくるみずみずしさや、文字の中に躍動する生命の力強さ

についてあきることなく語っていた。それは、あたかも鉄斎そのひとの相貌を目前にして話しているような温かい語り口だった。

南画家として近代日本画壇の巨匠といわれる富岡鉄斎は、京都三条の出身。陽明学や詩文に造詣が深く、学者・文人画家として八十九年の生涯を終えている。博学多識、希書の収集家としても有名なが、おびただしい秀作を残したため、贋作の多いことでも知られている。その作風は毅然とした文人気質の中に、豊麗、放胆、自由闊達さがあるふれると云われ、特に晩年の諸作は円熟のきわみにたった大芸術と評価されている。

今岡氏は、そうした偉人の「人間」を書の中にみてもあきないようだ。だが、鉄斎に対する知識はもちあわせていても、氏の解説を聞くまで絵をみるように書を見ることのできなかつたのが本音である。移動の車中でそのことを漏らすと、今岡氏は「一般に、日本の書というのは中国の唐の時代に完成された、あるひとつの楷書が基準となっている。その非常に形の整った文字が、いわゆる書のお手本となって広まってしまった。これは習字教育の弊害なんです。これはワクにとられた感覚を身につけてしまう。だから、外国人の方がよく理解することも多い。彼らは日本語が読めないにもかかわらず、書の素晴らしさを理解する。型にとられずまっさらな気持ちになって書を見つめてみれば、必ずその良さがわかってくる。人間のいのちの力や、澄んだ、透徹した気のようなものが、鉄斎の書から伝わってくるのわかるはずなんです」と、その弊害をまともにに受けた取材者を前に愛えた。

書学ぶ場合、はじめに形ありきではなく、古典の文字の中にある力をどれだけ感じることが出来るのか。その力をどれだけ表現できるかがたいせつだと今岡氏は力説する。つきつめれば、自分自身の中にそういう力を感じるものがどれほどあるのか、それに共鳴する感性を如何にして磨かなければならないかとの問題にたどり着く。

「だから、よい書というのは、いわゆる巧い書ではない。その文字の中に人間をほうふつとさせる力が潜んでいるもの。人間の生き様が表現できている

よい「書」とは、巧い書ではない。
人間をほうふつとさせる力。
人間の生き様が表現できているもの。
それがよい「書」なんです。
文字のカタチを
ただ美しくなぞったものは
書とはいえない。
自分自身のいのちの躍動を表して、
はじめて「書」といえるわけです。

もの。それがよい書なんです。文字のカタチをただ美しくなぞったものは書とはいえない。自分自身のいのちの躍動を表して、はじめて書といえるわけです」
こうしていつのまにか取材は授業？へと変貌を遂げ、わたしたちはさらに京の町をめぐるにつづけたのだった……
文／三村 深・写真／小笠原 圭彦



晴明神社



円山公園吉永大辨天



千本通り出世稲荷下ル、本家八ッ橋の看板。これも鉄斎。
通動途中のバスからみつけたのだそうだ。
粟田口青蓮院横にある「粟田陶師本半記念碑」。今岡先生は、以前、橋の大木を見にきてこの文字に気づいたという。退んで力強い気配は、鉄斎独特のもので、すぐにわかるのだそうだ。



東寺南門右側に鉄斎の書もある。に残された鉄斎の書。いずれも鉄斎八十七歳の折に書かれたもの。今岡先生は、昭和三十二年頃にしばしばここへ立ち寄ったそうだ。
富岡鉄斎の書
堀川今出川西入ル鶴屋吉信の看板。鉄斎の書。



堀川今出川下ル神明神社の石柱。これもまた鉄斎書。



これが青蓮院の橋木。



円山公園・吉水大辨財天女の記念碑。今岡先生は、中国の書家・金冬心を彷彿とさせる素晴らしい文字だと、この鉄斎の書をはめていた。



東大路春日通り東入ル聖護院八ッ橋の看板。鉄斎先生、甘党だったのかな？
撮影していると、偶然、知人に出会ってしまった。ちょっと照れながら談笑する今岡先生。



頂妙寺境内の奥にある善性院の積古場にて。今岡先生はここで教室を開いている。

プロフィール
今岡 徳夫
昭和四年生まれ、原根県津島町出身。昭和二十三年、原根師範学校（現、原根大学）を卒業後、江南小学校に勤務。上田縣立師範学校、森田子龍に師事するため京都に転居する。城陽市立文津川小学校に勤務後、京都市立明徳小学校をへじ、南大内、一橋、新野、今野、立派の各小学校に担任。平成元年、出水小学校校長を最後に四十一年間の教員生活を送り、創作活動では昭和二十七年、墨人会に所属。昭和三十年、第七回墨人会で墨人賞を受賞後、会長に。昭和四十二年、第一回日本現代書展にて墨大賞を受賞。翌年、京都市立美術館で江口翠玄との二人展を開催した。その後モリノエツ、二〇世紀日本の書展での出品をはじめ、平成元年、ニューヨーク・ギャラリー・モリノエツにて、88、日本の秀作美術展」に自作を出展するなど、旺盛な創作活動を展開。京都府、大倉炬火リレーボスターをはじめ、近年では平安建都一千二百年記念「オララム」など、揮毫多数。平成五年には自選作品集『陶師夫の書』を刊行した。

